

入学試験問題

教育研究分野	人間文化論、日本文化論、医事法学、科学史技術論、臨床死生学、ソーシャル・イノベーション論
科目	論述試験I

1、限界集落とは、その言葉の提唱者である大野 晃氏によれば、65歳以上の高齢者が集落の半数を超え、独居老人世帯が増加した為に、社会的共同生活の維持が困難な状態に置かれた集落のことを意味する。この状態からやがて限界を超えると、人口・戸数ゼロの集落消滅に至るとされている。以下別紙にある、山下祐介（2012）『限界集落の真実：過疎の村は消えるか？』の一部を読んで、以下の設問に答えなさい。

設問 山下氏の調査によれば、多くの集落の社会的共同生活の質は落ちておらず、実際に消滅した集落はほとんどないという。これは経済発展やインフラ整備の進展、また家族観の変化に対して家庭レベルが合理的に適応した結果、世代による地域住み分けが進行したためだという。この進行のメカニズムを、本文および添付のグラフを参照して、400字程度でまとめなさい。

2、次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

『令和元年版高齢社会白書』によれば、

- ・我が国の総人口は、平成30（2018）年10月1日現在、1億2,644万人。
  - ・65歳以上人口は、3,558万人。総人口に占める65歳以上人口の割合（高齢化率）は28.1%。
  - ・「65歳~74歳人口」は1,760万人、総人口に占める割合は13.9%。「75歳以上人口」は1,798万人、総人口に占める割合は14.2%で、65歳~74歳人口を上回った。
- とされる。

その際、「高齢者」の定義と区分に関して、『白書』は「日本老年学会・日本老年医学会「高齢者に関する定義検討ワーキンググループ報告書」（平成29年3月）において、75歳以上を高齢者の新たな定義とすることが提案されている。また、高齢社会対策大綱においても、「65歳以上を一律に「高齢者」と見る一般的な傾向は、現状に照らせばもはや現実的なものではなくなりつつある。」とされている」と指摘している。

設問 上記の指摘のように、65歳で一律に区切る「高齢者」の定義を見直すならば、高齢社会全体や人間の一生（ライフサイクル）の捉え方がどのように変わると考えられるか、あなたの専門分野に即して論じなさい。

岡山大学大学院ヘルスシステム統合科学研究科博士前期課程  
2020年4月入学 一般入試（第1回）

入学試験問題

教育研究分野	日本文化論
科目	論述試験Ⅱ

- 1、近代日本における死生観について、具体的な事例を2つ以上挙げて論述しなさい。
- 2、次の文章を読んで、下記の設問に答えなさい。なお、問題作成上、文章を省略・加工している。

(岸本英夫「死を見つめて生きる」、『読売新聞』1961年10月29日)

設問 この文章の筆者は、死をどのように捉えているか。死の捉え方の推移に留意しつつ説明しなさい。

以 上

岡山大学大学院ヘルスシステム統合科学研究科博士前期課程  
2020年4月入学 一般入試（第1回）

入学試験問題

教育研究分野	臨床死生学
科目	論述試験Ⅱ

1. 以下の英文を読んで、設問に答えなさい。

(Carol Gilligan, *In a Different Voice; Psychological Theory and Women's Development*, Cambridge: Harvard University Press, 1982)

設問1. この英文を日本語に訳しなさい。

設問2. この英文をふまえたうえで、具体的な事例を挙げながら、「ケア」についてのあなたの考えを論述しなさい。

→裏面に続く

2. 以下の文章を読んで、人生の最終段階に関する意思決定のあり方について、あなたの考えを論述しなさい。

(『朝日新聞』2011年2月23日、24日「患者を生きる」より作成。なお、出題の都合上、文章の一部を省略・加工している。)

以上